

伊達 137

発行日 令和2年12月21日

発行者 伊達地区小学校長会
会長 二階堂 康 男

編集 同 広 報 部

《 巻 頭 言 》



令和時代の「教育課題」に向き合うために

伊達地区小学校長会副会長

高 野 孝 男

(桑折町立釀芳小学校長)

◇ はじめに

令和2年度は、新型コロナウイルス対応が続く中でのスタートで、新学習指導要領完全実施、働き方改革の推進、さらにはGIGAスクール構想の早期実現によるICT教育環境整備と多くの教育課題対応が一気に押し寄せている。コロナ禍対応の厳しい社会情勢の中で、山積する教育課題と向き合い、活力ある学校を創造していくために求められる校長としての資質・能力を考えてみたい。

1 「with コロナの発想」で前進する

令和2年度 of 教育活動の取組を総括し、次年度の教育課程編成へ向け動き出している時期である。「今年度の学校経営・運営ビジョンに掲げた理想とする教育活動には至っていない」のが現状ではないだろうか。しかし、経験をしたことのない状況下でも臨時休校中の子どもたちの学びを保障するため、自己マネジメント力を育成する家庭学習の課題作成、基本的生活習慣の確認や学習意欲を高める「お便り」「ホームページ」「緊急メール」「動画配信」などに英知を絞り創意工夫して取り組んできた。今こそ、学校経営の最高責任者の校長として「with コロナの発想」で、できないではなく、「今ある環境の中で何ができるか」「何を整備する必要があるのか」という教育力や資源を見極め、マネジメント力を最大限に発揮できるチャンスだと捉え、力強く前進することが大切である。

2 「人の心」を動かし組織力を高める

「指示命令だけでは人は動かない。教職員もいろいろな家庭の事情がある。教職員の心に寄り

添って、組織を動かすことが肝心である。」これは今も大切にしている先輩の言葉である。教職員に寄り添いながら、充実した教育活動が展開できたと感じる喜びに勝るものはない。しかし、自分の範疇で物事を考え、待ったなしの判断が求められトップダウン式で指示を出すこともある。だからこそ、教職員が目標に向かって日々努力していることを評価し、自信と意欲を持ち続けることができるようにする校長の役割が重要である。「人の心が動くとき」に組織は活性化し、教育力が高まると再確認したい。

3 「ネットワーク力」で先を見通す

時事刻々変化する状況の中で、修学旅行等の学校行事の実施や年間指導計画の変更を余儀なくされ、判断に苦慮する場面も多い。先日「宿泊学習を体験して子どもが大きく変わった」と保護者から感謝の言葉が寄せられ体験活動の意義を再認識させられた。そのためにも、校長として迅速に判断できる判断材料として、校長会の組織を生かした「ネットワーク力」を生かして、先を見通して、未来の学校教育に何が必要なのかを根本から問い直し、考え、行動していく実践力が必要である。

◇ 終わりに

学校経営の最高責任者である校長として、常に学び続け、教育課題に向き合う強い姿勢と覚悟を持ち続けていきたい。

《 特 別 寄 稿 》

新たな伝統と引き継がれるバトン

伊達市立月舘学園小・中学校長 佐々木 透

今年4月に伊達市最初の小中一貫校として開校し、日々試行錯誤を繰り返しながら教育活動に取り組んでいます。本校は、伊達市教育委員会の指導のもと「英語教育」「ICT教育」「ふるさと学習」に力を注ぐ特色ある学校を目指しています。いずれもこれからの時代を生きる子どもたちに不可欠な学びであり、すべての学校が目指す教育活動と何ら変わりありません。しかし、コンセプトの教育資源を生かした「つなぐ教育」の実現には、9年間の「学び」と「育ち」の系統性は勿論、連続性ある教育活動の実現が鍵だと考えます。

また本校は、地域の中から小中一貫校設立の話が生まれ、地域の声を広げ、地域の子どものための学校を作りたいという地域住民の願いにより実現した学校です。ですから、地域の期待に応え、かけがえのない子どもや地域に貢献する「月舘学園」として進化していく使命があると全職員で確認しました。

以上、私に与えられた原稿テーマ「月舘学園の紹介」はここまでで勘弁していただきます。



9月末に行った『運動会』は、小学1・2年の「紅白玉入れ」に中学3年生が途中から助っ人に入り、一緒に勝利を目指しました。最後の種目の「紅白対抗選抜リレー」は、小1から中3までの代表がバトンをつな

ぎました。各チームが心一つに応援合戦とデットヒートを繰り広げ、盛り上がった熱い戦いとなりました。新たな運動会の試みを心配していた大人のマイナス思考と当日朝まで悩ませた雨雲を、子ども達の若いエネルギーが吹き飛ばす一日になりました。

続いて、初めての『学園祭』が行われました。小学校の教員にとっては、「運動会」を終えてホッとする間もない準備と指導の日々でした。子ども達は、中学生のリードのもと「全校アート」や「開閉会セレモニー」の寸劇、迫力の「全校合唱」など、これまで経験したことのない企画の連続とスピード感に目を輝かせて参加しました。

学園祭で印象的だったのが中学3年生の発表でした。彼らは「ふるさと学習」において、『地域民話（しろかきじぞう）の復活』と、『地元産の桃を使った菓子（名称：桃包み）づくり』について発表しました。発表の最後に、後輩の中学生と小学生に「自分たちの学び」を引き継いでくれるよう訴え、ステージから降りて各学年の代表にメッセージ付の「バトン」を渡すシーンがありました。それぞれのバトンには、自分たちが取り組んだ内容や、それぞれの学年の後輩に伝えたい「月舘学園の新たな伝統・願い」を記して渡したそうです。まさに、子どもの自主性が作り上げた「つなぐ教育の証」であると感じました。私たち教師が育てたかった学び、目指したかった学びの域を超える手応えを感じた瞬間でした。

バトンを渡した最高学年としての想いと、引き継いだ後輩の目の輝きをしっかりと胸に焼き付け、時代の流れとともに進化する「月舘学園」の教育活動にあたらねばならないと身を引き締める今日この頃です。



《 先 輩 よ り 》

頑張ってください 応援団が付いています

前伊達市立保原小学校長 佐々木 義 通

校長会では、本当にお世話になりました。いわき大会での清酒「伊達」は、今でも思い出しています。現在、私は、伊達市保原総合公園簡易宿泊所「とまっぺ」で仕事をしています。通学合宿が中止のため、一般の方々の宿泊等のお世話をしています。子どもたちと接する機会は少なく一抹の寂しさも感じています。

さて、3月退職時、新型コロナウイルス感染症が、これほど長く学校教育へ影響を与えとは想像すらできませんでした。そして、たぶんすべての校長先生方がお感じになったことと思いますが、

行事の実施の可否を判断する際など、これまでになく難しさがあったと思います。これでよかったのか、いつまでも悩まれたのではないのでしょうか。校長先生方のこれまでのご苦労・ご努力に対し、心から労い申し上げます、本当にお疲れ様です。校長先生方にあつては、ご自身の豊富な経験、鋭敏な物事への感覚、そして何よりも揺るぎない信念に基づき、自分を信じて職責を全うし、この難局を乗り越えられることと信じております。

心もとない私ですが、いつまでも校長先生方の応援団長と思っています。頑張ってください。

第二の人生が始まりました（近況報告）

前伊達市立掛田小学校長 高 橋 孝

時の流れに気持ちが追いつかない今春でしたが、お蔭様で無事に教員生活を終えました。伊達地区小学校長会の皆様には大変お世話になりました。

現在、伊達市教育委員会こども部で、こども相談員として福祉関係の仕事に携わっております。主に、要保護児童等への対策、児童虐待の防止、児童家庭相談援助、養育支援を必要とする家庭の把握と支援等の業務で、不案内なことも多く、学びながらの勤めが続いております。

昨今、コロナ禍も重なり、児童虐待、いじめ、不登校、貧困、DV等、子どもを巡る課題が増加し相談室でも関連する相談に向き合うことが多く、

対応の難しさを感じています。ケースは多種多様で問題解決は容易ではありませんが、子どもや家庭の状況を理解し、園や学校、関係機関と連携しながら、子どもが少しでも幸せな道を歩めるように微力ながらお手伝いできればと思っております。

一方、増えた休日には、母を師匠に野菜作りに挑戦し始めました。米寿を過ぎた母の教えは細かく、教わる側の苦しさを味わうこともあります。汗をかきながらの土いじり、野菜の世話や収穫に清々しい気分を満喫しています。

使 え る 時 間

前桑折町立半田醸芳小学校長 穴 戸 広 子

退職説明会で「これからは自立してください。」と言われました。今その言葉をしみじみと噛みしめています。学校にいるときは、通勤届や扶養申告書などの提出物は事務の先生が印刷してくれて、丁寧に昨年度の資料もつけてファイルに入れ、渡してくれました。今は自分でダウンロードして印刷し、調べなくてはなりません。まさに「自立」です。いかに周りの方に甘えていたか、支えていただいていたかを痛感しています。

さて、4月からは桑折町教育委員会こども教育課で、校長とは違った立場で学校教育に関わらせ

ていただいています。戸惑うことばかりの連続ですが、ここでも課の皆さんに支えていただきながら職責を果たそうと努力をしています。

ある本の中で日野原重明先生が「命は君たちが持っている時間です。命そのものはそれを使える時間です。寿命とは生きている時間ではなくて、使える時間のことです。使える時間をどう使うかを考えることが生きるということなのです。」と言っていました。これから私が見える時間をどう使うか、しっかり構想を練りながら頑張っていきたいと思います。大変お世話になりました。

毎日・・・何をしよう

前桑折町立伊達崎小学校長 半 澤 正 保

ゆとりある生活の中で、何ができるのかをよく考え充実していきたいと思っています。

まずは、本でもと…「茶の本、武士道、代表的日本人、論語と算盤」をノートにメモを取りながら読み進めました。若いときに日本人の心のあり方をしっかりと学んでいたら、子どもたちにもっと深い道德の授業ができたろうなと思うところが数多くありました。今からでも遅くはないとメモを元に日本人の徳についてまとめることで、考える力の若さは高めていきたいと思っています。

Eテレを見て、興味をもちだしたのが苔です。

ヒノキゴケ、スギゴケ、スナゴケなど様々な種類の苔を集めました。100円ショップの容器で小さなコケリウムを作り毎日スプレーで水やりをしています。苔は、ビルの屋上や壁面にはられ地球温暖化対策に効果をあげているようです。苔の増やし方の実験もしながら、楽しく庭の環境緑化を試みようかと計画しているところです。

新しい学校生活様式への適応など様々な課題解決に取り組んでいらっしゃる校長先生方の益々のご活躍を衷心よりお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

教職時代を振り返って思うこと

前国見町立国見小学校長 菅 野 敏 彦

教職36年の間、幾度か「勲章」をもらったなと思うことがありました。かなりの問題傾向を抱えたある男の子を2年間担任したことがありました。毎日が格闘でした。卒業式の翌日その子の高校生の姉が職員室に来て、私に「先生のおかげで、弟は生まれ変わることができました。」と言ってくれました。2年間の努力に対して頂いた「勲章」であると、今でも心の中に大切にしています。

校長職に就いている間は残念ながら「勲章」をもらったと感じたことはありません。そもそも校長は子どもと教職員の命と安全を守りながら、子

どもへの教育と教職員の職務の遂行に責任をとるという立場ですので、教諭時代のように「勲章」をもらったと思って喜べるようなことはない仕事であると認識しています。しかし、重い責任と覚悟をもって校長を務めた日々は、教職を退いた今、価値の高い意味をもって思い返すことが多く、その度に充足した気分になっています。

伊達地区小学校長会では大変お世話になりました。コロナ禍対応など諸事情のためお忙しい日々をお過ごしかと思います。皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。



編集後記

先輩方から玉稿を賜り、懐かしい思い出がよみがえってきました。

昨年度末からのコロナ禍で、感謝の会すら開けず、見送った3月。心残りでしたが、ついに、12月11日に感謝の会が開催できることとなりました。

私たちは、昨年度の県小学校長会研究協議会いわき大会での懇親会が忘れられません。先輩方から「伊達是一つ」という言葉を教えていただきましたが、まさにそれが体現されたときでした。

一斗樽を会場に運び入れ、鏡開きするという快挙。伊達地区小学校長会のまさに伊達な姿でした。

まだまだ収束の見通せない新型コロナウイルス感染症ですが、健康に留意しつつ、子どもたちのため日々を大切にしていきたいでしょう。

玉稿をお寄せいただいた先輩方、本当にありがとうございました。